

これまで間伐等が適切に進められてきたこと等により、森林からの土壌流出は抑制されていると考えられる。

森林内に蓄積している放射性物質が、水、大気系を通じて森林外に流出、拡散する量は、現時点ではかなり小さいと考えられる。

間伐・皆伐は、林野庁の調査によれば事故後約1年において、空間線量率8～9%程度の低減(スギ人工林)であり、その効果は限定的である。

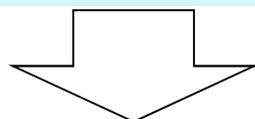
また、前述の空間線量率8～9%の低減は、森林の内部における調査結果であり、林縁部における線量低減を考慮すると、立木の伐採の低減効果は、8～9%より小さくなると考えられる。

さらに、スギなどの常緑樹の葉は、通常3～4年程度かけて落葉するため、今後数年のうちに低減効果はわずかなものになると予測されることも考えると、間伐等による空間線量の低減効果はほとんどないものと考えられる。

## 間伐・皆伐の考え方

長期的には、林床植生が豊かになることで土壌流出が減少することが期待されるが、短期的には、作業道の設置も含め、林床の攪乱により、土壌流出を促進するおそれがある。

なお、除染特別地域における落葉・落枝、枝葉の除去後、特別地域内除染実施計画の期限終了時点における住居等近傍の線量が、依然として20mSv/年を上回っており、立木に付着した放射性物質が要因となっている場合は、立木の伐採を実施する場合もあるなど、限定的に実施する場合がある。



間伐・皆伐は、空間線量率の低減効果が限定的であることから、空間線量率を低減させる観点からは、適切ではないのではないかと。

間伐・皆伐は、従来から樹木の育成、治山、水源かん養などを目的に実施されてきているが、放射性物質の流出・拡散の防止のために除染の目的で追加的に実施する必要性は乏しく、かつ、短期的に土壌流出を促進するおそれもあることから、適切ではないのではないかと。